

平成20年(ワ)第1978号、第2900号、第4164号、第5102号
ウイルス性肝炎患者の救済を求める全国B型肝炎訴訟・九州訴訟・損害賠償請
求事件

原告 原告番号1から91
被告 国

意見陳述書

2009年(平成21年)4月15日

福岡地方裁判所 第2民事部合議係 御中

原告番号15番

1 はじめに

原告番号15番です。

現在36歳です。

5歳のときにはじめた空手は、初段です。懸命に打ち込んだ結果、小学校5年生から中学校3年生くらいまでは、常に県大会の表彰台に登っていました。中学校1年生のときは全国大会で8位になりました。中学校3年生の時には、とびうめ国体の強化選手の候補になりました。

陸上の大会でも実績を残していた私は、高校に進学するとラグビー部にスカウトされました。私の高校は、前年度、九州大会で2位になっており、学校をあげて、新1年生を強化して花園に出場することを目指していたのです。そのような中で、1年生のうちにウイングのレギュラーポジションをつかんだ私は、母校の花園出場の夢をかなえてくれる有力選手として期待されており、私も、その期待に応えたいと、花園を目指して泥まみれになって夢中で練習していました。

2 花園にたつ夢が奪われたこと

高校2年生のとき、ラグビーの練習中に膝の靭帯を損傷して入院しました。この時、医師から、「B型肝炎に感染しているから、激しい運動はしないように。血液で人にうつる病気なので、ケガをして人に接触する可能性のあるスポーツはやめるように」と言われました。

母校を花園に連れて行くという自分の夢を取り上げられてしまいました。運動全般まで禁止されたことはとてもショックでした。しかし、病院では「20代で治る人もいる」と聞いていたので、自分も数年我慢すれば普通の生活

ができると自分に言い聞かせてきました。

私は、理由を告げないままラグビー部を辞めました。感染する病気だと聞いて、チームメイトにB型肝炎のことを話す勇気がなかったからです。それ以後、一緒に花園に行く夢を語り合った部員とは、疎遠になってしまいました。

空手も、国体強化選手の指定から外してもらい、その後現役を退きました。

3 肝炎が悪化し、余命の宣告を受けたこと

高校を卒業し、自動車整備の専門学校に進みました。叔父の事業を手伝うためでした。専門学校に通っていた2年の間も肝機能の数値は高いままでした。1か月間自宅療養しなければならなかった時期もありました。

自動車整備専門学校在学中のことです。母が私の病気を心配して、体を動かす自動車整備の仕事より他の仕事が良いのではないかと言い出しました。そして、柔道整復師をすすめられました。整骨院なら自宅で仕事できて健康管理もしやすいのではないかとのことでした。平成5年4月、開業資格を取れる学校を探し、宮城県仙台市の柔道整復師学校に進学しました。

まもなく、体全体に湿疹ができ強いだるさを感じるようになりました。受診した病院で、B型肝炎を発症していると告げられました。「治療をしなければあと10年の命」と言われました。

「信じられない。信じたくない。」私は、しばらくの間、受け入れることができませんでした。

4 インターフェロン治療と副作用

私は、学校を1学期で休学し、福岡に戻り、久留米大学でインターフェロン治療を受けることにしました。

インターフェロン治療は予想以上にきついものでした。

インターフェロンの注射を打たれると、数時間して、全身にドンとだるさのしかかり、とても動ける状態ではなくなります。そして、頭が締め付けられるように痛みます。また、関節も骨を曲げられているように痛みました。吐き気がするため食欲もなく、食べてもすぐに吐いていました。高熱も出ました。

入院中は意識障害があったのか、私自身はあまり記憶がありません。後から聞いたことですが、入院中はいつも朦朧として、「隣の建物から女の人が

手を振っている」とか、訳のわからないことを興奮して話していたそうです。家族は私の頭がおかしくなったのではないかと心配したそうです。

母は、家業のホテルの仕事を放り出し、毎日、見舞いにきてくれていました。完全看護で夜は帰らなければなりません、久留米大学病院から前原の自宅までは自動車で片道約2時間かかるため、母は家には帰らず、病院近くの駐車場で仮眠をとっていました。そして早朝また病院にきていました。夜中にも何度か様子を見に来ていました。私のことが心配で心配でたまらなかったのだと思います。それなのに、母に後で聞いたら、私はいつも「僕、死んだ方がいいのかなあ」と言って、母を悲しませていたそうです。

自宅に帰って通院でのインターフェロン治療を受けている期間も副作用はひどいものでした。食欲がないのに母が食事を運んでくるため、「食事はいらん」と言って食事を投げ捨てたこともありました。関節の痛みとイライラする気持ちを紛らわすために、家の壁を拳で叩いて穴を開けてしまったこともありました。また、音が気になって仕方がなく、ちょっとした物音がピンピンと頭にひびきました。このため誰も来ていないのに人が来ているように聞こえ、母親に何度も人がきたろうと尋ねていました。母が来ていないと答えると、母が嘘をついていると思って「来とったろうが」と大声で言って困らせていました。私もつらかったのですが、そのような私を見守らなければならなかった母はもっとつらかったと思います。

5 柔道整復師の道をあきらめざるをえなかったこと

久留米大学病院では2回、インターフェロン治療を受けました。

これだけ苦しんで続けた治療でしたが、医師からはウイルス排除ができなかったと告げられました。そして「もう、積極的な治療はありません」とはっきり言われました。

もう長くは生きられないという死の恐怖が襲ってきました。それでも、私には、治療を続けるしか選択肢はありませんでした。それで、柔道整復師の道はあきらめ、学校を退学して、治療に専念することにしました。

その後、私は、病院を変えて、さらに1回、インターフェロン治療をどうにかやり通しました。しかし、またしてもウイルスは排除できませんでした。

今は、抗ウイルス薬を飲んでいますが。この薬は現在の状態を保たせて進行を遅らせる効果しかありません。

6 現在の生活状況

3回目のインターフェロン治療を終え、通院治療になったころ、仕事をしなくなりました。病気に支配されるのではなく、積極的に自分の人生を切り開いていきたい。そう思ったからです。

いくつか仕事につきましたが、体調や治療との関係もあり、結局、母が経営しているホテルを手伝う形で従業員をさせてもらうことになりました。

妻とは仕事を通じて知り合いました。妻は私の病気を理解した上で、私との結婚を受け入れてくれました。もし肝移植が必要になったときは、自分の肝臓を提供していいとまで言ってくれました。そんな妻の言葉を聞いて、私は嬉しくて仕方がありませんでした。

私は、母にも、妻にもめぐまれ、そして、多くの周囲の方にもめぐまれて、本当に幸せだと思います。しかし、母や妻にかけている心配や苦勞を思うと辛くなることがあります。できることなら、健康になって、母や妻に樂をさせてやりたいと夢見ます。せめてもの恩返しがしたいのです。

7 最後に

私は、20歳のころから36歳の現在までB型肝炎の治療に支配されて生きてこざるを得ませんでした。スポーツを楽しみ、普通に仕事をして、普通の日常生活を送りたいといつも夢見てきました。何度も何度も苦しい治療に挑戦しました。家族にも心配や苦勞をかけてきました。

それでもB型肝炎は、私のささやかな夢もかなえることを許してくれませんか。

私が、これほどまでに苦しみ、そして家族に心配をかけた原因は、ずさんな予防接種にあります。しかし、国は、責任を認めようとせず、被害者の救済にも乗り出そうとしません。

裁判長、私は、今日、実名を公表します。少しでも多くの人に被害を知ってもらいたいからです。一日も早く、同じB型肝炎の被害者を救済して欲しいからです。

私の名前は尾崎芳文です。

裁判所におかれましては、私たちの被害から目をそらさず、一日も早い解決のためにご尽力いただきますようお願いいたします。

以 上